

葉集を読む

松岡 隆子

汗かわきゆく縄文の壺の前

中谷 信子

縄文土器の造形美に触れた感動が静かに伝わってくる。一万年以上も前の人々の暮らしの中で、芸術家でも専門の職人でもない人々がああ造形を作っていたことは感動的だ。食物の貯蔵や煮炊きを使う土器にあればほどの芸術性が施されていることに驚く。その感動を俳句で詠もうとすると17音の制約が厳しい。縄目文様の繊細な美しさや火焰型土器の複雑な造形美を諸に詠むのは難しかろう。掲句は対象から一步身を退き、感動を自分の身に引きつけて詠み成功している。

展示場に入りすーっと引いた汗が、縄文土器の前に立った時ゆっくり乾いていく感じが、緩やかな縄文時代の時間にも繋がるようだ。(かわきゆく)の進行形がよい。

ビバルデイらしき鼻唄袋掛

梶浦 道成

袋掛をしているのは葡萄、場所は葡萄園、歌はビバルデイの「四季」と勝手に推測した。葡萄の一房一房に丁寧に袋を掛けながら、秋の収穫へ思いを馳せる。豊かな実りへの期待

感に歌声が零れる。たまたま通りかかった梶浦さんはビバルデイらしき歌声に思わず足を止め、ダンディーな葡萄園の主の姿を(袋掛)で描いてみせた。

留守電の点滅水中花開く

植田喜代子

帰宅して部屋に入った途端、留守番電話の赤い点滅が目に入る。ボタンを押す。「用件は一件です」と乾いた機械音が応える。三件、四件ともなると内容を聞くまで落ち着かない。直ぐに返事を要する場合など着替えもそこそこに先ず対応しなければならぬ。時間的に連絡が無理な場合は翌日まで持ち越すことになる。留守番電話に頼っていてかえって不自由を強いられている感じである。テーブルの上の水中花が赤い。水中で生き生きと咲き続けるその赤さはどこか無機質で冷たい。留守電の点滅に通じるものがある。

場所変へて鯊釣りのまだ釣れをらぬ

並木富美子

鯊釣りは女性や子どもや初心者でも楽しめる庶民的な釣り、秋日和の河口や海岸で釣糸をたれる人々の姿は秋の風物詩の一つである。面白いように釣れるときもあれば、全く釣れない時もある。鯊が居そうな場所を求めて移動してみたものの相変わらず釣れないようだ。せめて一匹釣り上げるまでと、その釣人から目が離せなくなっている並木さんの姿を想像する。

紫陽花に弾けて雨の音となる

鈴木 富代

咲き始めの紫陽花は浅い緑色の極く小さい花だが、それが